

ベトナムの教材を利用した国際平和教育の実践記録

前ハノイ日本人学校 教諭

愛知県豊門市立中央小学校 教諭 佐藤 英治

キーワード：在外教育施設、ハノイ、平和教育、国際理解

1. はじめに

(1) ベトナムについて

- ・ベトナム社会主義共和国 Socialist Republic of Vietnam
- ・ベトナム戦争終結後、1976年建国
- ・ベトナム戦争について

第二次世界大戦以前のベトナムはフランス領インドシナ連邦としてフランスの植民地となっていた。しかし、ヨーロッパで第二次世界大戦が勃発すると、ホー・チ・ミン率いるベトナム独立同盟がベトナム民主共和国を樹立し独立することを宣言。しかし、この独立をフランスが認めなかった。フランスは南部に傀儡政権を建国し、ホー・チ・ミンの北ベトナムと争うことになった。(第一次インドシナ戦争)そして、1954年7月にジュネーブ協定により北緯17度線を境にしてベトナムは分断されることになった。

1964年のトンキン湾事件を機にアメリカは直接ベトナムとの戦争に介入していくことになった。そして、1965年にアメリカは南ベトナムに軍隊を派遣し、北ベトナムに大規模な爆撃を行った。アメリカからのすさまじい攻撃を受けた北ベトナムであったが、めげるようなことはなく、それどころかジャングルでのゲリラ戦を巧みに戦い、アメリカ軍を撃破した。結局、このベトナム戦争はソ連などの社会主義陣営がベトナムを支援し続けたこと。アメリカ軍は最大時には54万もの兵力を投入するが、ジャングル内では物資や食料の供給が困難であった為、実際に最前線で戦ったのは3割ほどだったということ。また、アメリカ本国にてベトナム反戦運動が起きたことなどが原因となり北ベトナムは大国アメリカに勝利することになった。

(2) 現地の状況

ハノイはベトナム北部に位置する首都である。街中を歩いて驚くのは、バイクの多さだろう。道路いっぱいバイクが走っていて、無秩序に走っているように見える。また、通勤時刻になるとバイクと車で道路がふさがり、思うように目的地に到着することができない場合もある。そのため、交通渋滞解消を目的に、鉄道の建設が進められている。

街中には日本製のバイクや自動車が走り、日本食レストランもたくさんある。本屋の店先には日本語を習得するためのテキストが並ぶ。多くのベトナム人にとって、日本は大好きな国である。また、空の玄関であるノイバイ空港第2旅客ターミナルは日本の協力で2015年に完成し、日本とベトナムの経済や文化の結びつきはますます深まっている。

(3) 現地の教育環境について

ベトナムの教育制度は、小学校5年間、中学校4年間、高等学校3年間で、それ以降は大学に進む。義務教育の授業料は無料だが、教科書や制服は有料である。近年ベトナムも学歴社会化が進んでいる。当地に駐在する日本人の子どもは、ハノイ日本人学校のほか、複数あるインターナショナルスクールに通っている。また国際結婚家庭の場合は、子どもを現地校に通わせるケースも少なくない。ハノイ日本人学校の中学部を卒業した子どもたちの多くは日本の高校に進むが、海外各国の在外教育施設やインターナショナルスクールに進学する例もある。

2. ベトナムの教材を利用した国際平和教育の実践について

(1) 小学部3年の実践記録

国語科 「ちいちゃんのかげおくり」とベトナム戦争（ベトナムのダーちゃん）を
題材にした物語の実践記録

①教材について

「ちいちゃんのかげおくり」は、子どもたちが最初に出会う反戦・平和教材である。戦後70年が経ち、戦争を知らない世代が多数をしめるようになってきているが、戦争によって多くの尊い人の命が奪われたことを、決して忘れてはならない。本教材は「かげおくり」という遊びを題材にして、戦争の悲惨さや平和を願う作者の思いが綴られた作品である。家族でした「かげおくり」、ちいちゃんがたった一人でした「かげおくり」、2つのかげおくりの情景を思いうかべることで、ひとりぼっちになったちいちゃん的心情に迫り共感的に物語を読み進めることができようになっている。本教材は、児童それぞれが自分の読みを深め、戦争の悲惨さ平和の大切さを考える、よいきっかけになる作品である。

次に今回取り上げた資料「ベトナムのダーちゃん」は、ベトナム戦争を題材にした実話に基づく物語であり、ベトナムで行われている戦争犯罪の実態をヨーロッパの国々に訴え歩いているベトナム人と、筆者が出会ったことをきっかけに書籍化されたものである。ベトナム人の主人公であるダーちゃんの母親をはじめ、村中の人々がアメリカ兵に殺されたベトナム戦争のつらい体験を基にした物語であり、ちいちゃんのかげおくりと同様に、戦争の非人間性を表している作品である。この物語では、「ちいちゃんのかげおくり」と同じように戦争に行ってしまったお父さん、家に残された主人公ダーちゃんとお母さん、妹の4人が登場する。家族構成や戦争が大切な家族を奪っていく様子など、「ちいちゃんのかげおくり」と同じ状況が描かれており、戦時中における日本人の家族愛とベトナム人の家族愛について比較しやすい文章構成になっていた。これら2つの作品を読み深め比べることで「命の尊さ」、「家族愛」、「平和への思い」を再確認させることができた。

②児童の実態について

戦争のことを全く知らない児童は、3名であった。ただ、戦争がどういったものなのか、戦争中の人々の暮らしや人々の心情、戦争の非人間性までを知っている児童は、ほとんどいなかった。また、戦争には全く興味がないという児童や、戦闘機をカッコいい乗り物と勘違いしている児童さえいた。

③平和教育を推進するにあたって、めざした児童像

児童像

- ① 自分の考えをもち、互いの意見を比べながら聞き、ふりかえることができる児童
- ② ベトナム人と日本人の家族愛を比べながら、家族について深く考えようとする児童

①に関して、自分の考えを友だちと交流させる機会を、意図的に設けた。「ちいちゃんのかげおくり」、「ベトナムのダーちゃん」は共に、主人公の女の子の目線にそって物語が展開されている。読者はその少女の目線で物語を読んだり、第三者（読者）としての目線で物語を読むことができる。視点を変えることで、様々な意見を生み出すことができる。ちいちゃん、ダーちゃん的心情を一人ひとり、視点を変えて考え、友だちと意見を交換することで、今まで自分が気づかなかったことに気づくことができ、自分の考えを振り返ることができた。最終的には、戦争と平和に対する自分自身の考えをもたせた上で、友だちの考えと同じところや違うところを比べながら聞き取り、自分の考えを文章にまとめさせた。

②に関して、太平洋戦争中の日本人がもっていた家族愛とベトナム戦争中のベトナム人がもっていた家族愛を比べることで「命の尊さ」、「家族愛」、「平和への思い」について考えさせた。「ちいちゃんのかげおくり」、「ベトナムのダーちゃん」では、共に大切な家族が戦争で奪われてしまう場面がある。その時の主人公、ちいちゃんとダーちゃんの心情を深く読み取らせ比較することで、2人に共通している心情は何なのか、2人が最も望んでいたことは何なのかを考えさせた。その上で、日本人であろうが、ベトナム人であろうが、同じ人間として戦争を憎み家族を愛する気持ちの尊さ大切さに気づかせた。そして、その家族を思う気持ちに、日本人、ベトナム人という人種の違いは関係無いことを考えさせた。

④授業の考察

授業の振り返り

① 成果

①自分の考えをもち、互いの意見を比べながら聞き、ふりかえることができる児童

今回の授業では、自分の考えをしっかりとらせるために、考える時間を十分確保することを心掛けた。また、児童が自分の考えをノートに書いているときに机間指導を行い、児童一人ひとりの考えの良さが表現できている箇所に赤ペンで印をつけて、自信をもたせると共に、話し合いを活性化できるように支援を行った。そのことで、教師も児童一人ひとりの考えを把握することができ、指名をする計画を立てることができ、全体での発表を整理して行うことができた。また、話し合いカードを作り、話し合いの流れを明確に示すことで、スムーズに話し合いを進めることができた。

②ベトナム人と日本人の家族愛を比べながら、家族について深く考えようとする児童

今回は、日本人とベトナム人の家族愛に焦点を当て、人種が違って家族を愛する気持ちは同じであることを伝えたいと考えた。戦争について漠然とした知識をもっている児童も数名いたが、戦争が自分の大切なものを奪っていく非情さ、非人間性を理解している児童はいなかった。戦争の悲惨さ、非人間性を体験的に理解させることはできない。そのため、戦争を扱った物語を深く読み取り、登場人物の気持ちになりきることで、戦争がもたらす悲しみや辛さ、くやしき、憎しみなどの気持ちを考えさせることができると考えた。戦時中の主人公「ちいちゃん」になりきることで、実際には体験できない戦時中の小さな子どもの気持ちになりきることができ、戦争の非情さ、非人間性を理解する一助になった。また現在、児童が住んでいるベトナムも日本と同じく過去に戦争をしており、そこで暮らす人々の気持ちを「ベトナムのダーちゃん」を深く読み込むことで考えることができた。最終的には、「ちいちゃんのかげおくり」と「ベトナムのダーちゃん」を関連づけて読み深めることで、戦時中の日本人と戦時中のベトナム人の心情を比較することができた。その結果、ベトナム人の家族愛の深さについて、考える良い機会になった。



「ベトナムのダーちゃん」を読む児童



学級全体で話し合う場面

② 課題

①自分の考えをもち、互いの意見を比べながら聞き、ふりかえることができる児童

3年生児童にとって、比べて互いの意見を聞くことは難しいことである。また、自分の考えと他者の考えを比較しているのか、そうでないのかを第三者が判断することは容易なことではない。今回の授業において、「いっしょに死のう」と主人公であるダーちゃんが、なぜそのようなことを言ったのかについて、考えさせた。話し合いを通して自分の考えと他者の考えを比較して聞き取ったのか、それとも漠然と聞いていたのか、検証する場面が本時の中になかった。また、ノートに話し合いの後に考えたこと、他者の意見が自分の意見に影響を及ぼしたことについて、考えを振り返る場面を作ることができていなかった。自分の考えと他者の考えを比較できたのか、話し合い前の考えと話し合い後の考えを比較して感想に書かせるなどの取り組みが必要だった。

②ベトナム人と日本人の家族愛を比べながら、家族について深く考えようとする児童

「ちいちゃんのかげおくり」を学習して児童が学んだことは、戦争が自分の大切なものをたくさん奪っていくこと、戦争の非人間性である。しかし、戦争でさえも奪えなかったものが「家族に会いたい、家族と一緒に暮らしたい」という強烈な思い、家族愛である。今回取り扱った「ベトナムのダーちゃん」でも、大切な母親が目の前でアメリカ兵に殺され、主人公であるダーちゃんが妹に「いっしょに死のう」と言う場面がある。その時のダーちゃん的心情と「ちいちゃん」の家族に会いたいという心情を関連づけることで、日本人、ベトナム人に関係なく「家族と一緒に暮らしたい」という家族愛の深さに気づかせたいと考えていた。何人かの児童は「ベトナムのダーちゃん」を読み深める中で、ダーちゃんが「いっしょに死のう」と言った言葉の中に含まれている、「家族に会いたい、お母さんに会いたい」という思いを感じ取っていた。しかし、話し合い活動や全体の発表でその考えを全体で共有することが、不十分であった。本来ならば、児童からの発言で家族に対する熱い思いを、全員に共有させたかったができなかった。グループでの話し合いの後に、全体でどのように振り返りをしていくのが課題である。

3. ベトナム生活での成果と課題

(1) 成果（気をつけたこと・苦労したこと）

人種の違いを認め、文化の違いを認め尊重することは、国際社会の中で生きていく上で最も大切なことである。だからこそ、ベトナムで生活する上で気を付けたことは、ベトナムの良いところをたくさん見つけることだった。例えば、ベトナムには儒教の考えが浸透していて、お年寄りの方々に敬ったり、子どもを大切にしたりすることは、日本より当たり前のようにされていた。

(2) 課題（残念だったこと）

ベトナムに住んでいると、ベトナムより日本の方が上で、ベトナムは劣っていると考えている児童生徒がいた。とても残念な考え方である。また、アジアの中で日本人が一番優れていると考えていたり、日本が文化的に一番優れていると感じていたりする児童生徒もいた。

4. おわりに

海外生活で私が1番感じたことは、世界は広いということだ。日本に居たときには想像もしていなかった広い世界が世の中に存在していることを初めて知った。グローバル社会と言われていた中で、狭い日本を基準に物事を考えていたように思う。日本で当たり前のことが、海外では当たり前ではなく、日本が何でも1番いいと思っていたことがそうではなかったことなど、日本という国を外から客観的に見ることができるようになった。自分からの視点だけでなく、他方からの視点で物事を見て、多面的に考えることができるようになっていくことが大切

だと感じた。だからこそ、今後は児童生徒に、多面的に物事を考えられるように教育していきたい。そして、一人ひとりの違いを認め、尊重する気持ち心情を高めていくことが、最も大切だと思う。そのことが、国際感覚豊かな日本人の育成に寄与し、国際平和を守ることに繋がると考える。